

松本

平成十一年立机文集

猫蓑会



平成十一年二月十七日

平成十一年立机式特集

目次

祝辞	東明雅	1
百韻『松五本』	倉本路子・橘文子担当	2~5
唐猫庵 瑞枝宗匠	歌仙 雷走る	6
	賛	坂本 孝子 7
冬霞庵 淳子宗匠	歌仙 竹の春	8
	賛	新井 土筆 9
臥猫庵 千町宗匠	歌仙 萩葎	10
	賛	矢崎 藍 11
袖菊亭 好敏宗匠	歌仙 木槿は白	12
	賛	鈴木 愼二 13
卯遊庵 志げ子宗匠	歌仙 満月や	14
	賛	式田 和子 15
祝立机五宗匠 緑の松五本	式田 和子	16
謝辞	大窪 瑞枝 上月 淳子 原田 千町	17
	豊田 好敏 蒲原志げ子〔住所録〕	19
立机式 祝宴次第		20

平成十一年猫菴会立机式

祝辞 東明雅

本日ここに立机披露をされる方々は、実は昨年四月二十六日、亀戸天神奉納俳諧の席で立机免状ならびに庵号を授与された方々であります。即ち、大窪瑞枝さんは唐猫庵瑞枝、上月淳子さんは冬霞庵淳子、原田千町さんは臥猫庵千町、豊田好敏さんは袖菊亭好敏、蒲原志げ子さんは卯遊庵志げ子の五名の方々であります。この事は「猫菴通信」にも掲載され、皆様すでにご承知の通りであります。

それでは何故に立机式と披露の席とが一つにならなかったのかと申しますと、事の決まったのが急だったため、諸般の準備が間に合わず、たとえば、新宗匠のシンボルとでも申すべき文台はまだ製作をお願いしてもいかなかった状態だったので、それならば正式の立机式と披露とは来年でもよいと言う事になった為であり

ました。

その後、新庄の阿部さんをお願いして、五つの文台を描える事が出来、本日は製作者である阿部太さんのご臨席の下に、またこうして多数の皆様のお祝いの中、このすばらしい文台を五人の方に新宗匠のシンボルとしてお渡し出来るのは、私に取って最高のよろこびであり、また受けられる皆様のごよきごもさこそとお察し申す次第であります。

このように多少の無理はいたしても、新たに五名の方に宗匠立机を許したのは、明治以来、衰退してしまつた連句をもう一度復活させ、芸術的にも庶民の新しい文芸として恥しからぬものに完成させたいと言う、私の念願を理解して、力になって下さる方を一名でも多く作っておこうという願いからに外なりません。

ここに新宗匠となられた皆様をお祝いするとともに今後の活躍を期待し、私の希望を申し上げて、ご挨拶とする次第であります。

平成十一年 立机式(祝)

付廻し
百韻

松 五 本

倉本路子
橋 文子

担当

未茂れ翁ゆかりの松五本 東 明雅 インターネットラブラブの文 中村ふみ

初鯛の音を運ぶ風 秋元正江 アトリエに過疎の廃屋改修す 金久保淑子

沖鯨包丁の腕請はるらん 式川和子 氷柱を照らす真夜中の月 内田麻子

無人と聞きし島に人影 穴沢篤子 寒の川霧立ちこめて音もなく 篠原達子

エルニーニョ測定装置始動して 米谷貞子 アンティックドール探すバサージュ 桑原美津

かの業ありてこの余技のあり 杉内徒司 ガスコーニユ訛が誇り銃士隊 鈴木美奈子

楽想は今宵の月の輝きに 豊田好敏 森の奥より刻告ぐる鐘 近藤守男

名残りの茶事の台子あれこれ 山口みつゑ 屋根裏の文学論議きりもなし 峯田政志

叡山を借景として京の秋 東 郁子 禁煙忘れさぐるポケット 小野シズ

作務衣の僧の辿る坂道 高瀬美保 繚乱の花舞ひ舞ひて現なき 上月淳子

若き娘のすらりと伸びし長き脚 山崎 恵 店に飾れる雉の剥製 村田冨美

^{ニホ}春深しから拭き済みし畳踏む 下鉢 清子 東大の時計正確銀杏散る 梅田利子

職人刈りの次男坊なり 長崎 和代 葉にしたる映画半券 青木秀樹

バラライカ歌声喫茶に長居して 久保田 庸子 いつもより爪を丸めに整へて 山口美恵

雨降る日には家事をさぼらう 和田 順子 夜叉のつもりがめろめろにされ 佐古英子

逢引を連絡するもいつも留守 秋山 志世子 命ぜらる井戸の水汲み薪割り 松本 碧

爛熟くつけ来ぬひとを待つ 須田 智恵 倉庫満杯古米古古米 鈴木 茂

砕氷船出航近き舫ひ綱 百武 冬乃 煎餅をかじった途端園の欠けし 吉川 憲助

ケ・セラ・セラ・セラ母の口癖 水島ますみ テレビドラマにくぎづけとなる 逸見 篤

キャッチャーのサインで投手肚を決め 神谷 安子 ゲーマーが二人三人番を待ち 生田日 常義

馴染んできたる制服を脱ぎ 浅賀 淑代 大き蜘蛛の團光る月影 副島 久美子

迷宮の事件も遂に解決す 八代 颯 詩画集の頁に付きし開き癖 五味 蓉子

籠のいんこが犬の鳴声 古村 系みこ 諸粥ばかり終戦の頃 佐藤 世止彌

みどり児の夢見て笑ふ良夜なり 坂本 孝子 雪に眠る社に木花咲耶姫 原田 千町

ハローウインのマスク選びぬ 高橋 豊美 瑠璃まだ淡きいぬふぐり群れ 椿 紀子

熟年となりぶらんこのきしむ音 矢崎 藍

鷺の鳴く寢覚の床の一禅寺 杉山 壽子

心を刺しに忍び寄る蜂 八木 聖子

うしろ姿の齡かくせず 山田 歌子

わたしより他の誰かに魅かれてる 柿本 時代

会場を狭しと舞へるダンスの輪 細川 研三

少しくづした肉太の文字 後藤 志津枝

彩とりどりのワイン楽しむ くのあや

着ぶくれて軽くて重いこの一票 由川 慶子

手土産のきしめんかなり重たくて 長谷川 芳子

猫も加はり炉辺の夜話 繁原 敏女

新幹線は西へ東へ 武村 利子

山拓きブランド造る町起し 加藤 治子

結婚をいそぐ三十路の女たち 浅井 沙衣子

ホルモン異常じはりじはりと 岡本 道子

ドタキャンされてうそ寒の彼 宮川 悦子

切れる子も閉ち籠る子も普通の子 船垣 渥子

笹舟にゆられて下る月の川 市野沢 弘子

あすは晴れさう鳶高く舞ふ 長坂 節子

魚籠にいっぱい大漁の鯨 おおたけんのすけ

はじめての競馬儲けた二百円 小園 好

還暦の父のバギーに乗せらるる 権頭 和弥

いつも損する下戸の割勘 月山 壹

士族育ちの母の憤み 登坂 かりん

月朧寄り道好きな友ふらり 中田 あかり

花氷大正ロマン封じ込め 蒲原 志げ子

離遊びの灯洩れくる 今宮 水壺

蓄音機聴く縁の籐椅子 田村 満子

坪庭の十の効用語りをり 名残オ 八角 澄子

憂国の士がささくれを病む 日高 英二玲

健康志向アロマテラピー 本田 弥生

南無妙と片割の月山の端に 中川 哲

カメレオン周囲に合せ色を変へ 橋野 代々子

ただひたすらに虫のすだける 川中 友子

霰はいつも不意に頬打つ 小原 正子

名残ウ 妹らの連珠は果てず冬隣 佛淵 健悟

滑明り木曾谷越ゆる旅の果 加藤 道子

求同存異首脳会谈 鈴木 慎一

あつけらかんと露天混浴 岩垂 景翠

相乗りでとばすハーレーダビッドソン 染谷 佳子

汗ひかる刺青男と抜け出して 青木 泉子

青春岬は追憶の中 大島 洋子

遠雷ながらひしと抱きつく 緒方 健

細巻の苺くゆらせ香に浸り 山田 美代子

バーチャルの出世ゲームにある女難 島村 暁巳

オレンヂひとつつ残る盛筈 吉澤 蘭石

哲学をするライオンの夢 中野 昌子

花霏々と第四楽章プレストに 大窪 瑞枝

朦朧の点描画布に溶け込みし 古賀 一郎

どこまで伸びる連風の糸 宮内 志乃

平成十年六月十日起首
平成十年十月十日満尾

連衆 猫蓑会会員

雷 走 る 唐猫庵瑞枝 捌

雷走る屏風浦のうらおもて
 玉石垣に放つ百合の香
 婦省子のパソコンチャットきりもなし
 キヤッチボールをせがむ弟
 月の上に棲める兎の歳いくつ
 榎櫛酒を注ぐ器とりどり
 鎌祝村中同じ名字にて
 金田一さん帽を目深に
 口紅の濃くて謎めく捨煙草
 待たすホテルへ飛ばすフェラーリ
 セリエA移籍の弁も清々し
 むせても好きな牡蠣の酢の物
 底冷えの路地は胡弓と月の影
 流れる雲は変ホ長調
 「考へるヒント」ワゴンに乗せて売り
 学生証は偽造できます
 過激派の首領も潜む花の山
 団扇太鼓で陽炎を踏み

清子 孝子 好敏 蘭石 悟乃 瑞枝 乃 孝 敏 石 乃 孝 敏 石 乃 孝

しゃぼん玉飛ばせば夢の彩増えて
 鶴の姿に眠る名城
 国替への沙汰に戸惑ふ国家老
 年貢御免を迫る外圧
 こけし彫る唐変木も木の仲間
 うちのシャム猫つんと横向く
 司祭服脱がせて抱くタトゥーの背
 鋼鉄の処女仙人掌の蜜
 十六鳴りの砂を歩けば砂の泣き
 駅裏に立つ占師老い
 スポットで舞台に浮かぶ斜め月
 糸瓜の水で肌を引き締め
 桐み捕り婚姻色の鮭の群
 浮棧橋に並ぶ海鳥
 先代の墓碑銘未だ決まらずに
 応接室に飾る古地図
 研修の旅終へし日の花吹雪
 黄粉たっぷり草餅の苞

清 孝 乃 同 清 同 敏 同 孝 同 清 同 石 乃 清 乃 石 敏 孝 乃 石 敏 孝 乃 石

平成十年七月二十六日 首尾 於 緑華亭
 連衆 下鉢 清子 坂本 孝子 吉澤 蘭石
 豊田 好敏 日下 悟乃



唐猫庵 大窪 瑞枝

東洋英和女学院より東京女子大英米文学科、東京
 外語大イスパニヤ語科卒。
 英仏にわたる詩文耽溺。近代小説史を研究主題
 としたが、ある時より文も学も捨て、遊と楽を主
 題とすることになった。
 音楽活動は宗教音楽研究会合唱団、カナダのパ
 ッハコアイアなどに属し、オラトリオを歌ってい
 たが、滞米中に日本帰郷の思いしきりとなり、帰
 国とともに長唄三味線に入った。
 長唄東音会会友、東京女子大長唄研究会で学生指
 導に当ること十二年で現在に至る。
 連句歴は二期生としてACCに入り、伝導の書を
 頂いて猫養会同人となる。すぐれた先輩と後輩の間
 に挟まって心太のように押し出されて、今に至った。

唐猫庵瑞枝宗匠

御簾の内 坂本 孝子

大窪瑞枝さんに立机のご沙汰があった或る日、
 いとも愛らしいシャム猫の仔が舞い込んで来たそ
 うな。もとより猫好きの庵中深く傳かれることにな
 った。さて唐猫庵の御簾の内を垣間見るにその
 博識たるや、古今東西上品下品表裏、膨大な情報が生
 菜屋の抽出しの如く収められており、軋みも知らず何時
 でもするすると開くのである。またその情報分析と行動
 力には敬服するばかりで、初期ACC連句教室では「吉
 野の会」に、猫養同期では「遊喜の会」に参画、緑華亭
 でも重要な推進力である。そして唐猫庵の本業は長唄・
 三味線のお師匠様。演奏会や母校女子大での指導に忙し
 い。連句界に於てもその明晰な捌と鋭い感覚で新しい時
 代をリードされることを――。

竹の春

冬霞庵淳子

捌

一筋の道歩み来て竹の春
 しじまを深め鳴ける虫の音
 端正の月をさへぎる雲もなし
 抹茶を点でてつまむマシユマロ
 膝に来るダックスフントにお裾分け
 学校帰り麦笛を吹く
 若い衆の調子の早き夏神楽
 流し目おくるあの娘気になり
 筒井筒地球の裏まで追掛けて
 西部戦線異常なしとか
 カウントダウン始まってゐる世紀末
 四人にひとり癌で死ぬとふ
 松葉酒後生大事に棚に置き
 絵蠟燭売る月冴ゆる町
 早起きをひとに奨めて我は寝ね
 暗れたる海に大島の見え
 ゆるゆると花の下ゆく路線バス
 俊寛忌なり浪人の兄

淳子 弘子 美保 保 麻 蓉 糸 麻 弘 糸 澄 麻 保 麻 保



冬霞庵

上月 淳子

東京生れ。旧制の三輪田高女卒業。旧制の跡見学園専攻科の文科（現在は短期大学）卒業。

学生時代から現在に至るまで、一貫して短歌と俳句と読書を趣味としてきたが、昭和五十八年ACCで東明雅先生に連句を学び、この文芸にすっかり魅了された。

このほか、小原流の生花専門教授の資格も持つていて、各流派の華道展などに足を運ぶことも多い。

また、ルネッサンス以降の西欧絵画の観賞の目的で、ヨーロッパや北アメリカ、カナダなどの各都市や美術館を歴訪してきた。

孫がだんだんと成長してきた今では、自分の好む配色とデザインで洋服を縫ってやり、着て喜ぶ顔を見ることも、生き甲斐の一つでもある。猫藪会同人会員。

ナオ

永き日を自伝小説読みあかず
 喰はねど太るこれは何故
 もと小町七人寄ればおそろしく
 アウトレットが流行るこの頃
 虚か実かマグレット描く不思議な絵
 大統領の恋不適正
 寒牡丹いま別れきし女思ふ
 秘めたる愛は虹ときらめき
 ミスターの続投決まりホツとする
 ジサマ百才バサマ百才
 無縁坂本郷菊坂弦の月
 訪ふ門に香る木犀
 鯨釣つてゐてもサラリーマンの顔
 転んじやったのちちんぷいぷい
 剃刀は今使はぬ理髪店
 籠の鸚鵡が愛想ふりまき
 塔やさし新薬師寺の花を賞で
 夢色シヨールまとふうららか

保 澄 弘 蓉 保 澄 保 麻 蓉 弘 蓉 糸 同 保 蓉 弘 淳 澄

平成十年九月二十四日 首尾 於 房連庵
 連衆 五味 蓉子 八角 澄子 内田 麻子
 山口みつゑ 高瀬 美保 市野沢 弘子

賀・冬霞庵淳子宗匠

おめでどう淳子さん

新井 土筆 (俳誌「狩」同人)

上月淳子さま、この度は立机、庵号の栄誉をお受けになられ、冬霞庵上月淳子宗匠になられる由おめでどう存じます。冬霞庵とは立冬のお生れ日に因んでのこととか、まことに美しくお人柄にふさわしい称号と存じます。

俳句の会ではいつも明るく、若々しくその上博識、それでいて少しも高ぶらないところが好ましく、おつきあいをさせて頂いてまいりました。厳しい道を求めて研鑽を積んでいらした賜物のこの度のご昇進を心からお慶び申しあげますと同時に、多くのご友人の中の一人に数えていただけることを誇りに存じます。これからは一層お忙しくなることと存じますが、お体にお気をつけてご活躍ください。

萩 律

臥猫庵千町

捌

萩律分けひとすぢの小道哉

ただ白々と風の月光

深秋の自動オルガン廻すらん

指人形で交はず挨拶

背負ひ鞆三角おむすび取り出して

卯浪細浪を越ゆる釣り舟

サングラス刺青を競ふ男達

君はいまでもあどけないまま

恋文の一言一句覚えをり

奔馬の蹄急ぐる泥濘

蛮王に漢の遺臣の用ひられ

冬至の為替睨むディーラー

冴ゆる月樽のワインも夢を見る

襟裳岬に唄ふ望郷

左手で達磨図を描く大僧正

かごめかごめの子等に囲まれ

馥郁と山懐の花盛り

蚕の絲を七色に染め



臥猫庵

原田 千町

千町 弘子 孝子 蘭石 澄子 鶴鳴 孝 鶴 澄 鶴 同 孝 同 弘 蘭 澄 弘 蘭 澄 蘭

東京は本郷の生まれ、八雲高女卒。祖父は画家で時に俳句も捻る多趣味な人で、臥猫庵陽谷と号した、この度その庵号を継ぐことを願ってお許しを戴いた。美術文芸その他何にでも興味を持つのは祖父譲りなのかもしれない。連句は叔母と友人が真似事をしており、否応なしに引きずり込まれた。始めるからにはと東 明雅先生の「連句入門」を入手、その先生の講座のあることを知りACCに入り忽ち虜になった。俳歴のなさを痛感し「未来図」に入会、間もなく鍵和田柚子主宰より連句を担当するよう御依頼を受け、幸にも熱心な連衆に恵まれ共に学びながら今日に至る。昭和六十二年連句伝導書を拝受、猫蓑同人となり、平成十年四月よりACC連句入門の講義を受け持たせて頂いたが、体調を崩し同年九月に辞任し、大変ご迷惑をおかけし申し訳なく思っている。

春燈下ミトコンドリア殖やしみて

宙に魂とばす魔術師

帽子から取り出しこれが世紀末

あらぬ噂にひとつ嚏

大雪に降り込められし雌と雄

心中片割れ生き残る科

あな怖や展示に鉄の貞操帯

問ひかくるごと郭公鳴く

剣豪の見えぬ瞳にやどる神

陶土粘り揉む手つき鮮やか

望の夜一升を据ゑ詰め将棋

カルパッチョには松茸も添え

編隊を組んで野を行く銀やんま

塚の周りはいつも清らか

筆ペンでさらりと書いた案内状

切り揃へたる髪の五分刈り

散りしきる花の中なる翁姥

雛納めの箱に貝桶

平成十年八月二十九日 於 俳句文学館

連衆 市野沢弘子 坂本 孝子 吉澤 蘭石
八角 澄子 井上 鶴鳴

孝 同 蘭 孝 鶴 同 弘 蘭 澄 弘 蘭 澄 蘭 町

賢・臥猫庵千町宗匠

臥猫庵千町姫まゐる

矢崎 藍

(参州めぎつね)

羅や誰に逢ふとはなけれども 千町

なんてすてきな発句でしょう。典雅で繊細な調

べでありながら、そこにいるのは確かに現代の自

意識をひそめた女。そしてこの句はたちのぼるような気

配でつぎの句を誘いこみます。こういう魅惑的な句がお

昏からほろほろといくらでもこぼれるのが千町姫なので

す。(姫といわずなんと申し上げようか)。捌がまた華麗。

巻きあがった一巻は千町姫独特の抒情に包まれ、紛れる

ことがあります。

忘るまじアウシユビツも広島も 多迦夫

地球は宙に浮かぶ宝石 千町

鍛えられた創作者としての才能の輝きは、まさに連句

界に浮かぶ宝石。一層のご活躍をお祈りするめぐつねに

ござりまする。

コン。

木槿は白 袖菊亭好敏 捌

残月に木槿は白を浮かせけり
 早や鳴き出だすかなかなの声
 竿選び鯊の釣果を期待して
 カーナビ付の新車到来
 隠し湯を巡る相談きりもなく
 襖を開き吾子がみつめる
 時計塔棲みついてをる寒鴉
 殿の紋章桶と鉞
 切なさは夜離れ続きの褥にて
 レポのあひ間も迫る逢引
 ついと来てついと去りゆくドイツ鯉
 青道心はまたも夏籠
 商品券束で数へて月涼し
 司りに天下る知恵
 最高裁隣漫才演芸場
 肖像画から肝斑を消し去る
 花守の語る右手に花一枝
 姥子の宿で菜飯戴く

複製機スカイダイブで春翔ばし
 覗き込みしは海境の岨
 奪衣婆に身ぐるみ剥がる地獄口
 相打ちとなるアラブヤンキー
 ほととぎす飛び去る先は暗き森
 裸身の乙女馬に添ひをる
 みちならぬ恋と知りつつ師を慕ひ
 ひねくれた壺並ぶ店先
 ランチにはガーデニングのハーブ摘み
 ブリッジも好きちゃんちゃんこ好き
 放生会残りし亀を月照らす
 蒲の穂絮の育つ湖
 菊人形贗仁左衛門見栄を切る
 只今参上藪井竹庵
 夢うつつ兵とし駆けし幾山河
 風羅念仏唱ふのどらか
 二百号画布一面に花描き
 軒を濡らして糸の春雨
 平成十年八月二十四日 於 四の宮桃径庵
 連衆 篠原 達子 島村 暁巳 日高 玲
 松本 碧

好敏 達子 暁巳 碧 同 玲 達 巳 玲 敏 巳 碧 達 巳 玲 同 碧 玲 巳 碧 玲 巳



袖菊亭 豊田 好敏

東京新宿十二社に生れ、世田谷で育つ。都立十五中（現青山高校）から高等学院を経て、早稲田大学文学部フランス文学科卒。学校では西条八十氏、山内義雄氏、新庄嘉章氏らに学び、ポートを漕ぎ、夜は紅灯の巷をさまよった。
 卒業後は三十八年間、広告代理業の会社ひと筋に、メーカーや販売会社の商品がイメージよく売れるようにと、たゞ一筋に考えることが仕事であった。そのツールの一つが広告コピーであり、キヤッチフレーズであることから、言葉の魅力に打たれて連句の世界に浸っている。
 生来、他人とのコミュニケーションが好きのため、ゴルフよりテニス、絵画より音楽となつて、現在も乞われるままに定期刊行物の編集を数誌手掛けている。

賢・袖菊亭好敏宗匠

見事な俳諧師に

鈴木 慎二 (猫蓑会)

好敏さん（仲間内ではコウビンさん）は頼れる人、面倒見のよいひとで通っている。それもその筈、学生時代は名門早稲田のポート部の正選手とした活躍された。漕艇は八人の気持がびつたり一致しなければ船が進まない。冒頭の資質はこんな所で養われたものか。連句では、渋谷の会で面倒をみられ、私も五年程前にこの会で生まれて初めて「連句」なるかくもあやしき魅力にとり憑かれた。
 連句の技の面でも、風雅な味わいと下世話な洒落つけそして現代風刺などの表現力を併せ持った。好敏風を形成している。お育ちは東京人ということで博識で洗練されてはいるが若干粘りに欠け、ままならぬと投げ出す癖があるかも知れない。ともあれ、いよいよ精進を積まれて、将来必ずや見事な俳諧師になられることを願っている。

満月や 卯遊庵志げ子 捌

満月や御沙汰まぶしき老の坂
 今や開かん大輪の菊
 新走り杜氏快心の作ならん
 息つめて見る指揮棒の先
 美術館猫の彫像床の上
 具をあれこれと散らす鮪桶
 きりきりと祭半纏豆絞
 肩揉みほぐす如く口説かれ
 表札は一つ二つでもめてます
 A Eと言ひE Cと言ふ
 王子だけ売り物にして大ブリテン
 回転木馬手綱しつかり
 雪吊りの縄掛け終へて弦の月
 おでん盛る爺鍋の湯気越し
 連れ煙草名画座在りしこの辺り
 大陸横断列車特急
 花房に和魂を見しと異邦人
 耕す野面狙う望遠

志げ子 和子 道子 満子 弥生 代々子 文子 淑子 正美 美 淑 富美子 文 和 同 文 美 正 美 淑

ナオ
 弥生富士表紙くつきり飾る号
 タコとインクの校正の指
 ふとよぎる宇宙の芯の暗い穴
 流れの木屑もまれもまれて
 あのお方げて物食ひの健啖家
 八ツ日鰻を好む僧正
 瓜蠅を抜く手も見せず切り落し
 出来ちゃった婚と人は言ふなり
 芳町の噂後から引祝
 つひ癖が出る社長・先生
 十六夜を逆さで眺む高梯子
 ナウ ロザリオ祭に聖母穩やか
 芋煮会同窓生は髭面で
 元関取と草野球する
 サイン文字練習せしも今は夢
 春の賛歌の洩るる絵ガラス
 花千里貴種の涙を秘める上
 美智子妃殿下お声のどらか
 平成十年十月七日首尾 於 鎌倉おんめ様

代和 道生 満生 道生 和道 満和 淑富 代同 淑同 げ和

連衆 式田 和子 加藤 道子 田村 満子
 本田 弥生 橋野 代々子 橋野 文子
 金久保 淑子 小原 正子 大島 富美子



卯遊庵 蒲原志げ子

兵庫県西宮市生まれ。大阪府立市岡高等女学校卒。
 六十余才にして連句の世界を知り、昭和六十三年
 にACCで東 明雅先生の講義を受ける。伝導書を
 頂戴した後、鎌倉に連句グループ「うらら会」を結
 成する。
 会員数十〜十五名で桃径庵式田和子宗匠ご指導の
 下、毎月第一水曜日、鎌倉駅前の大功寺で歌仙を興
 行する。連衆と和氣諺々の一日、遅いながらも努力
 の甲斐あり近頃は「随分ご上達なさいました」とお
 褒めの言葉を頂いている。
 名ばかりの代表者もぼんやりしておれず、これよ
 りの精進を決意、あれこれ趣味の道を無駄に遠回り
 して来たが、この無駄を乞食袋に詰め込んで、にん
 まり笑える。巻の為に努力したい。

費・卯遊庵志げ子宗匠

希有な人 蒲原志げ子さん 式田 和子

「希有な」という言葉があります。
 一番初めに鎌倉でお目にかかったとき、あ、
 この方は連句にむいていて！と思いました。う
 らら会のお世話をなさるようになって明雅先生
 が「しっかりとリーダーのいる所は栄えるよ」と
 とおっしゃったのがびたりです。連句ばかりでなく、
 それ以外のことがすべて「希有」なのです。人扱いの
 上手さ。抜群の仕事の能力。教養としてのお茶。近頃
 書いていらつしやる猫養通信のエッセイ。この読書の
 範囲がまた希有です。
 私の幸せのうちの一つは、志げ子さんのような方と
 知り合えたこと。これも連句のお陰です。宗匠として
 の益々のご活躍お祈り申し上げます。

祝・立机五宗匠

緑の松五本

猫蓑会副会長

式田和子

この度、東明雅先生の御薫陶を受けられた五人の方々が宗匠とされましたこと、まことにおめでたいことでございます。

明雅先生は、「連句のすすめ」ということをお話し下さいました。その中の「連歌十徳」(宗匠)

- 一、不詣叶神慮 神に詣らなくても叶う。
- 二、不勤至仏果 勤めなくても仏果に到る。
- 三、不尊交高位 身分違ひの人とも交わる。
- 四、不恋思愛別 恋しなくても恋を知る。
- 五、不行見名所 いかなくても名所を知る。
- 六、不老知古今 年と関係なく昔を知る。
- 七、不親為知音 長い交際でなくても親密。
- 八、不節遊花月 その季節外でも遊べる。

- 九、不移宜四季 四季の変化が楽しめる。
- 十、不捨通憂世 出家せずとも憂世離れ。

このお教えをよく身につけられて宗匠方は立机なさいました。明雅先生はその上に、

- 一、連句をやると長生き。
- 二、頭を使うから呆けない。
- 三、友人が集まる。

をつけ加えられました。

今後は、松の枝を揚げられ、その深い緑の下で楽しく連句する人を増やすために、ご精進なさって下さることをお願いして、お祝いとさせて頂きます。

おめでとうございました。

謝辞

緑の糸

唐猫庵 大窪 瑞枝

昭和五十六年、志した邦楽の世界の険しさに息苦しくなつて、何か気散じにお教養つばいものでも聴講しようかと朝日カルチャーの広告を掲げた私の目に飛び込んだ「連句」の文字。そういえば昔、芭蕉七部集とかおいしそうな句いに引かれたことがあったっけ、と軽いのでACCに迷い込んだ私は途端に浮袋もなく情無用の実作のプールに突き落された。

句もないから揚句を作れと言われて「私、駄目です」と悲鳴を上げたら、明雅先生は忽ち「わたし駄目です唄りの下」と見事に句にされてしまった。以来、才も勉強もない私が連句につながっていられたのは、ひたえに人の縁のおかげである。世に優れた師縁、多彩な「猫蓑」の友縁。どうぞこれからも何の働きもないこのでくの坊宗匠をどこか片隅に置いてやって下さらんことを。

謝辞

連句の魅力に支へられて

冬霞庵 上月 淳子

昭和五十八年十一月、ふとした縁でACCのお仲間に入れて頂いたのです。何も知らない私を、東先生は優しくそして辛抱強く、導いて下さいました。先輩方もいろいろ私の下らない質問にも答えて下さり、少し呑み込めたかなと思うと、また次の壁にぶつかり、私はやっぱり才能がないのだと落ち込みの繰り返しで、でも一度も止めようとは思わなかったのは、それだけ連句の魅力に引かれていたからだと思えます。此の度、思いがけなく、立机の御沙汰を頂き、誠に有難くお礼申し上げます。

不束ながら、今後とも私なりに精進して参り度いと申って居ります。先生始め諸先輩方どうぞ変りなくお導き下さいます様、よろしくお願いいたします。

謝 辞

生涯の花

臥猫庵 原田 千町

私は誰にも隔てなく与えられる自然を喜び美術や音楽を鑑賞できるだけで幸せ、文芸は読む楽しみで充分満足の筈としておりました。ふとしたきっかけからACCに入りまして、明雅先生に連句の醍醐味をお教え頂き、その虜となつて忽ちに年月が経つてしまいました。思いもよらぬ宗匠の名のお許しを賜り、この度は立机させて戴きますなど、我が事とは信じられず誠に夢のよう、私の生涯に唯一の花でございます。連句の奥の深さは学ぶほどに更に奥の道が見えてまいりますよう、この後、更に一層の精進をせよとのお励ましと存じまして、身に余る光栄ではございますが、有り難くお受けすることにいたしました。篤く心から御礼申し上げます。

謝 辞

俳諧の面白さにどっぷり

卯遊庵 蒲原志げ子

立机式と言う暗れがましい席をしつらえて頂き大勢の皆様のお参会を厚く御礼申し上げます。

立机のお話が御座いました時は俄かに信じ難く、どなた様かとお間違ひでは？と矢礼にも明雅先生に念を押す等、周章狼狽、越し方の不勉強、行く末の責任と、寝られぬ夜を過ごしました。俳諧の面白さだけに、どっぷりと漬かって居ります昨今、名に恥じない勉強を促されたと理解致して居ります。

鎌倉の「うらら会」も熟達の方達が増え、明雅先生、式田和子先生の薫陶の賜物と連衆共々感謝致しております。これより一層の精進を致しまして、猫蓑、「うらら会」の発展に努力致す所存で御座います。

謝 辞

連句との出合で変わった運勢

袖菊亭 豊田 好敏

昭和六十二年、鎌倉鶴岡八幡宮で東明雅先生にお目にかかった時から、私の運勢は変わった。連句は捌が治定すると、句の下に作者名を記す。先生が「コウビン」という呼び名がいいよ」と仰せられ「ハイ」とお返事をして以来、生まれて始めて違う呼び名でデビューしたわけである。

私は、かつて小説の題名をつけるのなら「ン」のつくものがよいということを開いたことがある。夏目漱石は「坊ちゃん」「三四郎」「門」「明暗」「虞美人草」など「ン」のつくものが多い。

「ン」は「運」に通じるからだかどうか定かではないが「コウビン」というもう一つの呼び名で遊ばせていただいて以来、いろいろな展開ひとつひとつに、感謝の毎日である。

平成十一年立机宗匠 住所・電話番号一覧

- 唐猫庵 大窪 瑞枝
〒181 0015 三鷹市大沢四一八一三
☎〇四二二二二一四七七
- 冬霞庵 上月 淳子
〒213 0011 川崎市高津区久本三六一一四〇一
☎〇四四一八三三五四四〇
- 臥猫庵 原田 千町
〒108 0074 港区高輪一五一一三〇二
☎〇三三四四五一六四六一
- 袖菊亭 豊田 好敏
〒141 0022 品川区東五反田三一一三三〇一
☎〇三三四四一一三七七
- 卯遊庵 蒲原 志げ子
〒248 0022 鎌倉市常盤九二七一一九
☎〇四六七一一三七八九

立机式と文台について

「連句辞典」及び「ねこみの通信」から抜粋

立机式 宗匠から独立を許された者が、その旨を披露する意味で設ける式のこと。師から文台を授けられ、証書が授与され、専門的職業人（業俳）として認められる。

文台 正式の俳席で、執筆が懐紙を載せるために用いる小さな机。芭蕉の使用したものとして、二見瀉文台・むら尾花文台・鳥羽文台などが伝わっている。文台は俳諧師の間に相伝され「座の文芸」を象徴するものとして尊重されている。起源は連歌時代からで、大きさは必ずしも一定しないが、享徳四年の定めに左右一尺八寸、幅一尺二寸、高さ三寸五分とある。

宗匠 東明雅先生は、「ねこみの通信」の中で「昔は俳諧の宗匠となるには、才能とともに非常な努力が必要であった。立机するということは、今日たとえば相撲取りが大関になる程とは言わぬまでも…。それだけに当時の宗匠は権威があり、あこがれの的だったのである」と記されている。

「松五本」平成11年立机文集

平成11年2月17日発行（非売品）

編集・発行 猫養会

印刷所（有）一木社 中央区新川2-21-15

平成十一年 猫養会立机式及び祝宴次第

（来賓接待 内田 麻子、受付責任者 中田 あかり）（敬称略）

進行係 佛淵 健悟

- | | |
|-----------------------|----------------------------------------|
| 開会の辞 | 佛淵 健悟 |
| 1. 会長挨拶 | 東 明雅 |
| 2. 新宗匠の紹介 | 下鉢 清子 |
| 3. 免状並びに文台の授与 | 会長より一名ずつ授与
介添え 式田 和子
新宗匠代表、大窪 瑞枝 |
| 4. 会長への謝辞 | 杉内 徒司 |
| 5. 新宗匠への祝辞 | 式田 和子 |
| 6. 同 上 | 上田 素舟 |
| 7. 同 上 | 坂本 孝子 |
| 8. 祝吟披露 | 副島 久美子 |
| 9. 祝電披露 | 来賓 新庄北陽社 阿部 太 |
| 10. 祝 辞 | |
| 11. 新宗匠に花束、記念品の贈呈 | 新宗匠代表 上月淳子 |
| 12. 猫養会への謝辞 | 高橋 豊美 |
| 13. 連台詞（つらね） | 稀音家六久美代 社中 |
| 14. 記念撮影 | |
| 15. お祝いの長唄 | 連句興行の卓を作る |
| 16. 新宗匠退席
休憩（約20分） | |
| 17. 連句興行（二十韻）開始 | |
| 18. 上記作品披露 | |
| 閉会の辞 | 市野沢 弘子 |

以上